

ごあいさつ

「一般社団法人日本老年看護学会」に移行したこの一年、7月の第21回学術集会、8月には「急性期病院において認知症高齢者を擁護する、日本老年看護学会の立場表明 2016」（本紙裏面に短縮版を掲載）のホームページ上での公開、9月からは認知症ケア加算2に対応した研修事業の全国7か所での開催など、多くの事業を展開しました。会員も着実に増え、2,000人を越えました。多くの看護職の方たちに、本学会にご参加いただくことを大変心強く思っております。

来年度の第22回学術集会は第30回日本老年学会総会との合同大会となります。会期中に会員総会を開催し、今年度の総括と来年度の事業計画を報告させていただきます。ウィークデイの開催となりますが、ぜひ名古屋国際会議場にお運びください。みなさまにお目にかかれるのを楽しみにしております。

一般社団法人日本老年看護学会 理事長 堀内ふき

日本老年看護学会第22回学術集会のご案内

■テーマ 超高齢社会における看護のパラダイムの転換～最期まで輝く人生を支援するために～

■会期 平成29年6月14日(水)～16日(金)

■会場 名古屋国際会議場

(名古屋市熱田区熱田西町1-1)

■大会長 鈴木みずえ (浜松医科大学臨床看護学講座)

■参加費 会員 事前10,000円,当日12,000円

非会員 事前12,000円,当日12,000円

■プログラム (抜粋)

第1日:6月14日(水)

日本老年学会合同プログラム

第2日:6月15日(木)

[第5会場 レセプションホール]

9:00～11:00 合同シンポジウム:高齢者医療の変革をめざした転倒予防

13:10～13:55 会長講演:最期まで輝く人生を支援するための老年看護の創造

14:10～16:10 特別講演:人生の最期まで尊厳を保つためのパーソン・センタード・ケア

16:20～17:50 教育講演:わが国におけるパーソン・センタード・ケアの実践と社会の変革(仮)

[第6会場 141+142]

9:00～11:00 シンポジウム1:高齢者の輝く人生を送るための意思決定支援

15:30～16:30 教育講演2:高齢者の排泄障害に対する看護

第3日目:6月16日(金)

[第5会場]

9:00～11:00 合同シンポジウム:治し支える医療におけるエンド・オブ・ライフ・ケア

13:10～14:30 教育講演3:いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション(仮)

14:40～16:40 シンポジウム2:高齢者が最期まで輝く人生を送るためのチームの力

[第6会場]

10:00～12:00 シンポジウム3:老年看護学における国際研究

15:30～16:30 教育講演4:滋賀県東近江市(旧永源寺町)の高齢者在宅療養支援

■社員総会 6月15日(木) 11:50～ 第8会場

■会員総会 6月16日(金) 8:50～ 第6会場

■事前参加登録は5月1日(月)までです。

第32回アルツハイマー病協会国際会議のご案内

■テーマ 認知症:ともに新しい時代へ

■会期 2017年4月26日(水)～29日(土)

■会場 国立京都国際会議場

学会誌・投稿締切のお知らせ

第22巻第2号(2018年1月発行予定)

締切 2017年7月31日

第23巻第1号(2018年7月発行予定)

締切 2017年11月30日

※随時査読も受付しています。

急性期病院において認知症高齢者を擁護する、日本老年看護学会の立場表明 2016 (短縮版)

今日、認知症を患うということは、長い老いの過程において、国民の誰もが他人事では終わらず、自分の親や祖父母、いずれは自らもたどる道になりうるものです。

急性期病院に入院する認知症高齢者は、慣れない環境で興奮と混乱をきたしやすく、そこに付き添う家族にも、入院中の対応に困難感が生じます。そのような中、急性期病院において看護師は、認知症高齢者（患者）のケアに取り組みにくい要因を抱えています。その一つは、今現在の学習や研修方法では認知症に対するマイナスイメージを払拭できないこと、二つには、病院という生活から切り離された環境や認知症高齢者の個性に迫る実践が蓄積しにくい看護体制など、さまざまな制約の中に置かれているにもかかわらず、介護施設と同様のケアや成果を求められること、三つには、認知症高齢者の意向を共有するコミュニケーションスキルを手に入れていないため、患者の生活像と回復像を描き難く、患者・家族を遠ざけたい思いになりがちなこと。そしてこれらの背後に、「効率・スピードを求める治療優先の医療」という大命題があることも指摘しておかなければなりません。

一方、このような「医療側の要因」と対をなす「家族側の要因」も存在しています。それは、認知症高齢者（患者）が理不尽な扱いを受けることがあっても、本人に代って命を背負う重圧から、“治るのが一番”と考え、治療や医療者の前に口をつぐんでしまい、結果として、認知症高齢者が護られない状況がおきています。ここから見えてくる最大の問題は、結果として医療側と家族側双方から本人が擁護されない事態が発生し、その狭間で認知症高齢者が孤立してしまうということです。

急性期病院における認知症高齢者の看護が抱えている目下の問題の本質を以上のように捉え、日本老年看護学会は、急性期病院で働く看護師（看護職者）に対して看護の方向性を示すとともに、医療・ケアチームの連携協働を図り、かつ急性期医療を受ける認知症高齢者とその家族の安心と安寧を保証する看護を推進するために、以下の8つの立場を表明します。

- | | |
|------|-----------------------------------|
| 立場 1 | 認知症高齢者へのマイナスイメージを払拭します |
| 立場 2 | 治療優先環境のもとで認知症高齢者本人を擁護します |
| 立場 3 | 治療後の回復像に基づく生活像を家族と共有して早期退院を目指します |
| 立場 4 | 急性期病院という制約下での本人重視の医療・ケアの推進策を提示します |
| | ①身体拘束を当たり前としない医療・ケア |
| | ②高齢者の混乱や家族の我慢を助長する対応に気づく医療・ケア |
| | ③認知症高齢者の生活像を描写する医療・ケア |
| | ④生活像に基づく予期的個別ケアをチームで推進する医療・ケア |
| | ⑤認知症高齢者に適さない医療・ケア環境ならびに慣習の改善 |
| 立場 5 | 認知症高齢者に付き添う家族の忍耐と重圧への理解を深めます |
| 立場 6 | 認知症と認知症ケアに関する知識を刷新します |
| 立場 7 | ガイドライン策定や診療報酬改定に向けたエビデンスを提示します |
| 立場 8 | 学術的知見の蓄積により認知症看護の体系化を図ります |

日本老年看護学会はこの提言の具現化に向けて、看護職者に働きかけるとともに、多職種との連携協働、介護家族や一般市民と手を携えることにより、急性期病院全体への波及を目指します。今回の立場表明は、現在の急性期病院の状況に基づいており、今後の医療制度等の変化や社会からの要請に応じ、定期的な見直しを行います。

(全体版も含め、学会ホームページにて、公開中です。)

事務センターからのお知らせ

[メールマガジン用メールアドレス登録のお願い]

本学会では、会員のみならず一般市民へメールマガジンを配信しています。理事会、各委員会からの報告、学術集会や研修事業、ワークショップ等のご案内、他団体からの情報等を1か月に1度程度、お届けしています。配信を希望する方は、会員専用サイトからご登録いただくか、下記

事務センターまでメールにてご連絡ください。

【編集】総務（広報）担当理事：北川公子

【発行】一般社団法人日本老年看護学会事務センター
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル2F

TEL : 03-5206-7431 FAX : 03-5206-7757

E-mail : rounenkango@nqfm.ftbb.net

URL : <http://www.rounenkango.com/>